

2015年8月1日（土）1校目

上演11

富山県 富山第一高等学校

「高校生 なう」

第39回全国高等学校総合文化祭
第61回全国高等学校演劇大会

講評速報

生徒講評委員会 担当委員

池阪真緒 （埼玉県立浦和北高等学校）

神宮寿朗 （瓊浦高等学校・長崎県）

高橋 翔 （島根県立松江南高等学校）

便利に使っているSNSの光と影。SNSと共存している自分たちをうつしだされているような気持ちになる。まさに高校生の“イマ”を表した劇であった。

CDを提出直前に紛失した放送部がいる合宿所に、合宿をするために初戦を目前にして張り詰めた空気のソフトテニス部が来た。

放送部員は制服、ソフトテニス部員はジャージと対照的な衣装であった。舞台上に立つ役者の数が多かったが、一人一人を明確に描いていた。なかでも、ソフトテニス部は、Tシャツの色がみんな違っていたり、上級生は自分の好きな格好なのに、下級生は学校ジャージを着ており、心の距離や上下関係が表されていた。黒い骨組みで合宿所の部屋の四隅を表現していた。かなりシンプルなつくりで、ドアや窓の開閉や電気の付け消しはパントマイムで演じていたが、空間がしっかりと伝わってきた。

ソフトテニス部の1年生がミーティングで、先輩に対して面と向かっては本音を言えない。SNS(LINE)を使って、それぞれの思いを伝えたが、同じ場所にいるにもかかわらず、直接会話をするのではなく、小さな画面だけを見つめる姿に強い違和感があった。

実際とは違う他人に見せる顔を、“仮面”をかぶっていると表現している。この“仮面”に対しては、仮面は外した方がいい、本音で話すべきであるという意見や、昔から人は仮面をかぶっているのだからそこまで悪いものではないという意見も出た。

最後に、朋子は遙香と別れる。「私は遙香にむかついたことなんてないよ。また学校でね。」と、いうメッセージが映しだされた。このメッセージに対して、講評委員の中では、「きちんと自分の思いを伝えられた。使い方を間違えなければSNSは良いものなのではないか」、「まるく収めるためにLINEを使った。まだ結局仮面をかぶっているのではないか」と意見が分かれた。

LINEでの会話の画面をプロジェクターで映し出していた。会話は文字だけで行われていた。言葉で話さないことが、語るときの表情や感情、気持ちの重さ軽さを明確に伝えることがない原因であると観客に再認識させた。

数年前までは存在しなかったSNSが、ここまで広がり、嫌な思いをすることもある。しかし、“イマ”を生きる私たちは、インターネットという名の蜘蛛の巣に引っかかりながらもSNSとうまく付き合っていかなければならない。自分のSNSとの関係を考えるきっかけとなる劇であった。

